

島本町文化財調査報告書

第18集

広瀬遺跡（堂後）発掘調査報告書

はじめに

島本町は、大阪府の北東端し、京都府との境に位置する人口約3万人の自然豊かな町です。平成20年には文化財保護条例を施行し、文化財や歴史に対する意識を高め、個性豊かな町づくりを推進してきました。今回の報告書は古代から近世に至る遺跡となる広瀬遺跡の宅地開発に伴う発掘調査の成果を報告するものです。調査の結果、鎌倉時代以降の石敷きの遺構や土師器皿が多量に出土するなど大きな成果を得られました。

調査に際しては、大阪府教育委員会をはじめ、ご協力を賜りました関係諸機関の皆様、また発掘調査にご理解、ご協力をいただきました土地所有者の方や近隣の皆様には深く感謝しお礼申し上げますとともに、本町の文化財行政に対し、今後ともご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

島本町教育委員会
教育長 岡本 克己

1. 広瀬遺跡の位置と環境

広瀬遺跡は、島本町内で確認されている埋蔵文化財包蔵地の一つである。遺跡は町の中心部を貫く西国街道の東西に広がり、これまで奈良時代から江戸時代にかけて多くの遺構や遺物が検出されてきた。平成元年に実施した島本町立第一小学校のプール建設に伴う発掘調査では、8～9世紀頃と思われる倉庫建物跡が確認され、調査地の北側に、奈良の東大寺の荘園であった地域（水無瀬荘園跡遺跡）が広がるこ



第1図 調査地位置図 (1/5,000)

とから、水無瀬荘民に関係する人達の集落があった可能性が高いと考えられてきた。

また平成21～22年にかけて実施した広瀬一丁目（国木原）の調査では、後鳥羽上皇が造営した水無瀬鎌宮と同時代に建てられたと考えられる建物跡や多くの軒丸・軒平瓦、白磁や飾り金具などが出土し、大きな話題を呼んだ。

2. 調査にいたる経緯と概要

今回の調査は、宅地造成に伴う緊急発掘調査で原因者によるものである。

事業主の開発時期の関係により第1次、第2次の2回に分けて調査を実施することとし、第2次調査については、第1次調査の状況を見ながら、掘削深度や調査場所などを考慮する計画にした。調査場所はいずれも道路予定部分のみで、開発計画では宅地部分は造成を行い、基本は掘削を行わないので、住宅建設時の設計書より、遺構面が壊されると考えられる場合に立会い調査を行うこととした。

第1次調査では、南東方向に約40.0m、南西方向に約17.0m、幅約6.0mのトレンチを設定した。この調査では、人工的に構築されたと思われる石敷きや、大きな石組の井戸など、一般の宅地とは考えにくい遺構などを検出したため、次年度に第2次調査を実施することとなった。

第2次調査のトレンチは、第1次調査地の南側をさらに、南西方向に約37.0m延長し、幅は同様に約6.0mを設定した。ここでは、大量の土師器皿が出土し、第1次調査で考えられた一般宅地ではないことを裏付ける結果となった。

I. 第1次調査

調査期間：平成23年1月11日（火）～2月25日（金）

調査場所：島本町広瀬一丁目38-3・39

調査面積：約340㎡

主な検出遺構（第2・3・4図）

●溝 S D01

上層で、南北方向の近世の溝（近年の用水路）の痕跡を発見した。それに並行するように整然と並ぶ石列も検出した。この下層にも古い時代の溝が同方向に存在した可能性があるが上層の溝に切られて明確には確認できなかった。

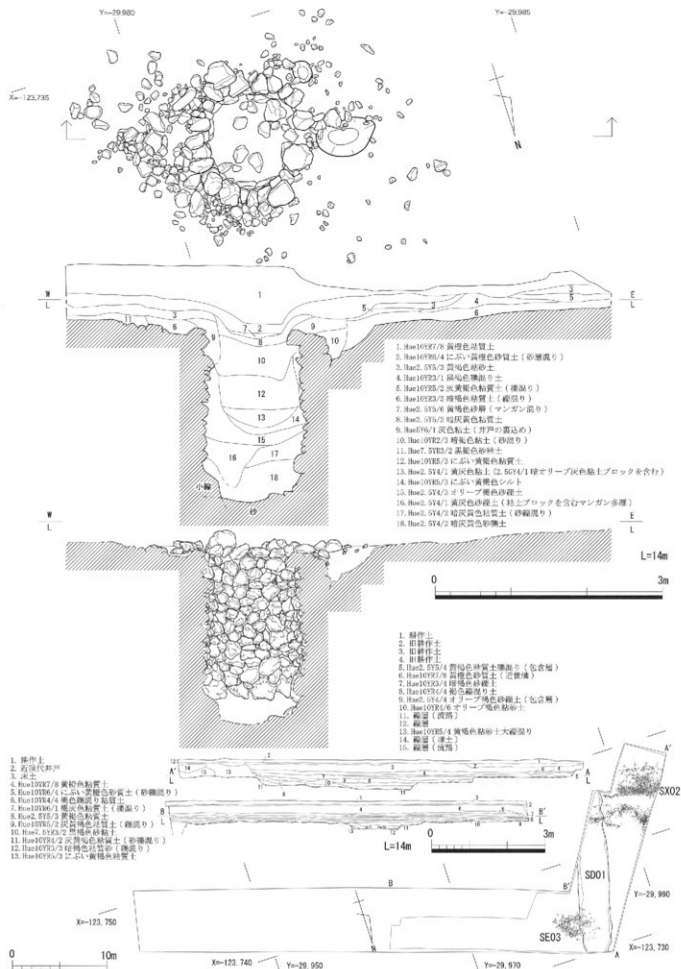
●石敷き列 S X02

西側端で、人工的に土で固められた北西方向に延びる石敷きを検出した。どのような用途で作られたのかは、現段階では分からないが、この石敷きの一段下からも、並行して同じような石敷き列を検出しており、二段構築になっていた可能性が考えられる。このことから、石敷きの南側に何らかの建物があり、それに関係する基礎の可能性も考えられる。下層の石敷き列から出土した土器は、上層のものより若干古相を呈しており、長期間に渡って、施設が存在した可能性も考えられる。

また、調査地のすぐ北側には水無瀬川が流れ、近くには淀川も流れていることから、周辺地域は古くから何度も氾濫の被害にあったと思われ、そのための護岸施設のような役割を果たした可能性もある。

●井戸 S E03

石組の井戸を、調査地中央部で検出した。約18mの掘形を持ち、深さは約20mである。出土遺物から室町時代後半～安土桃山時代に作られたものと考えられる。非常に大きな石が使用されて、丁寧



第2図 SE E03平面図・土層図・断面図（1/50上）とトレンチ平面図・断面図（1/100, 1/400下）



第3図 調査地全景



第4図 井戸検出状況

に作られており、北側にある水無瀬川で採取された石ではないかと考えられる。

●その他の遺構

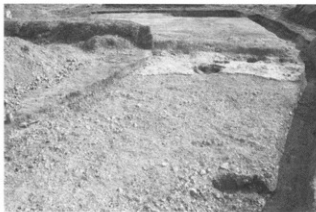
井戸の東側で約2.0mの幅の溝状の遺構（土坑か？）を検出した。調査範囲が少ないので、詳しくはわからなかったが、出土した土器から、井戸が作られた時期よりは古いと考えられ、南側で検出した下層の石敷き列の時代と同じくらいと思われる。

II. 第2次調査

調査期間：平成23年4月11日（月）～5月24日（金）

調査場所：島本町広瀬一丁目909・910

調査面積：約220㎡



第5図 調査地全景



第6図 土器出土状況

主な検出遺構（第5・6・7・8図）

●土器群 SX04

最近まで使用されていた畑地のアゼの斜面に数百枚の土師器皿を投棄した土坑？を検出した。土坑と言っても、明確な掘形は確認できなかったため、斜面にそのまま投棄された可能性が非常に高い。土師器は斜面の北側に何層にも渡って重なっており、張り付いた状態で出土した。アゼは調査範囲の北東約60m以上続いていたため、調査区を延長して広げたが確認できず、また、アゼの南側にはま

1. 礫土
2. Hae10YR5/8 黄褐色礫混り粘質土
3. Hae7.5YR4/6 褐色礫混り土
4. Hae2.5Y3/3 暗オリーブ褐色礫混り土
5. Hae10YR5/8 黄褐色砂質土（マンガン層を含む）
6. Hae10YR5/6 黄褐色砂質土
7. Hae10YR5/2 灰黄褐色砂礫
8. Hae10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
9. 礫層（流路）
10. Hae10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（砂礫混り）
11. Hae2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土
12. 礫層（流路）



第7図 トレンチ平面図・断面図 (1/125)

ったく出土しなかった。

このことから考えると、建物施設が南側に存在していて、この建物の外側に向かって大量の土師器皿を一气に投棄したのではないかと考えられる。このような出土状況を考えると、何らかの祭祀的な意味合いを持つと思われる。

出土遺物（第9・10図）

以下今回の調査（第1・2次調査）全般にわたって出土した土器について詳細を記述する。

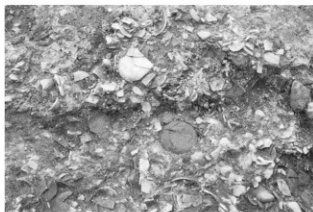
まず最初に、第2次調査でアゼの斜面（土器群S X04）から出土した大量の土師器皿（1～18）についてであるが、大きくは小型の皿（口径約9.0cm前後）と、やや大きめの皿（口径約13.0cm前後）のものに分類でき、口縁部にヨコナデを施し端部は外反しながら丸く収めるものが大半占め、京都産を思わせる口縁端部を内湾させるものも若干含まれる（7・8、15・16）。また中にはコースター型（17・18）と呼ばれる大、小の大きさのものも含まれている。この遺構での大きな特徴は出土土器の約95%を皿類が占めていることで、形は定型化したものではなく大半が地域色を持つ樟葉産である。白色を呈した京風のもの（9）が混じっているが、ここでも地域的な特徴を持たせている。時期は13世紀後半～14世紀初め頃のものと考えられる。

次に、石敷き内（S X02）より出土の土器（19～22）である。（19）は天目茶碗、（20・21）は羽釜、（22）が火鉢である。全般に生活用具や煮炊具が大半を占めている。下層から出土しているものは13世紀後半～14世紀頃のものも多く、地域的な特徴をもつものが多い。また、上層で出土したものは、15世紀～16世紀前半頃のもので、その中には（19）の天目茶碗などが含まれ庶民の生活の中で使用されたと考えにくく、ここで生活をしてきた人達は寺院などに関係していた可能性が高いと考えられる。井戸S E03出土の土器（23）は青磁の底部、（24）は瀬戸・美濃系で底部が糸切りの平碗、（25～28）は土師器皿で京都産のものと類似するが、ここでも地域的な要素を持っている。16世紀前半頃のものと考えられ、このことより、井戸の成立年代は16世紀前半よりさかのぼると考えることができ、この時期以降に使用され、江戸時代の前半くらいまで続いたと思われる。

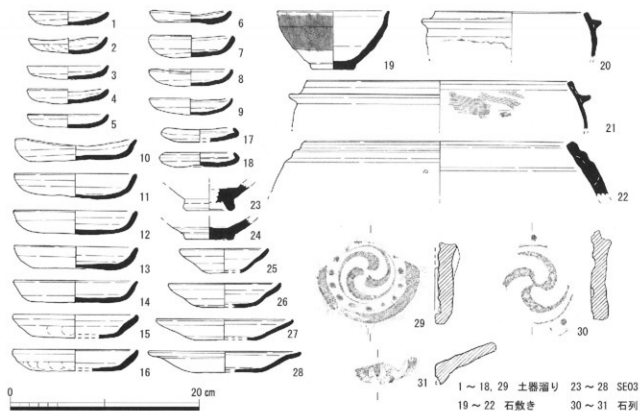
（29）（30）は右巻三ッ巴文の軒丸瓦である。（29）は巴頭が尖るが、それぞれの巴頭は離れており、引っ付いてはいない。巴文の周りには大きな珠文を疎に配する。（30）も巴頭が尖るが、三つの巴文の巴頭が文様面の中央で引っ付く。巴文の周りには大きな珠文を疎に配する。（29・30）共に丸瓦部は残存していない。（31）は陰刻の剣頭文の軒平瓦である。平瓦部凸面はタテナデが施されており、タタキ痕が残っていない。凹面には非常に粗い布目痕が残る。図化していないが、他にも丸・平瓦片が出土している。丸瓦の凸面に縄タタキ痕、凹面には細かな布目痕が残る。縄タタキの後に、凸面にヘラ書きで「×」が記された丸瓦もある。平瓦の凸面には縄タタキ痕が残り、凹面には布目痕がなく、離れ砂が付着する。丸・平瓦のいずれも平成21年度調査の広瀬遺跡から同様のものが出土している。また、同調査では（29）や（31）と胎土・焼成・法量・文様が類似したものも出土している。

3. まとめ

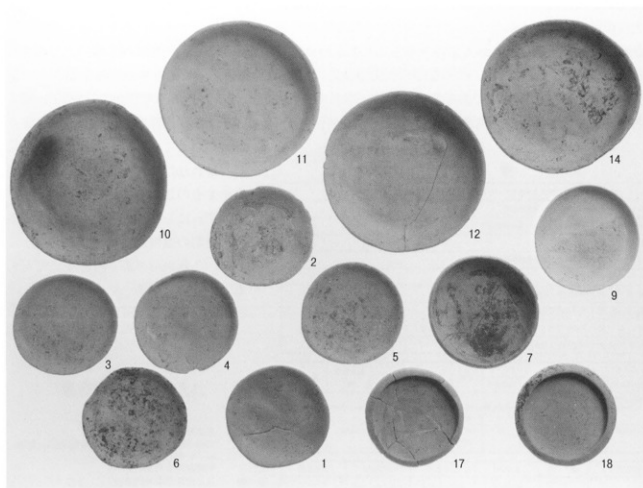
今回の主な調査成果は、人工的な北西方向に延びる石敷きや、河原石を用いた大きな石組の井戸など、一般的な宅地跡などにはあまり見られない遺構の発見に加えて、傾斜地に投棄された数百枚にも



第8図 土器出土状況



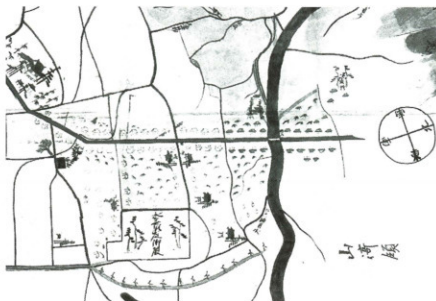
第9図 出土遺物実測図 (1/4)



第10図 出土遺物写真

及ぶ大量の土師器皿が出土したことなどである。

石敷きは、敷地内の小道とも考えられ、中国産の青磁碗などが出土した大型の石組井戸、土師器、食器類の大量消費等からは調査地を含むこの付近に、寺院等の大きな施設が存在していた可能性が高いと推測される。古絵図や文献資料などから、この付近に寺があったことが分かっているが、寺の開基は1583年（天正11）となっており、今回出土



第11回 調査地付近の古地図

した土器の推定年代よりも若干時代が下る点などから先行する寺院等の施設があったものと考えられる。

今回の調査では、水無瀬離宮跡に直接関連する時代の遺構の検出には至らなかったが、現在の水無瀬神宮にそう遠くないこと、また、水無瀬離宮（上の御所）の中心地に近いことなどから考えると、歴史的な関連性は十分に考慮すべきであろう。水無瀬離宮そのものは、承久の変（1221年）で後鳥羽上皇が隠岐に配流されたことで主を失うことになるのだが、その後家臣であった藤原信成・親成親子が水無瀬離宮に御影堂を建て菩提を弔うことで水無瀬宮として継続され、明治時代以降は水無瀬神宮として今日に至っている。そんな中で、上皇をしのび「法楽和歌会」等の行事が何度も催されており、中でも連歌会最高峰である宗祇・肖柏・宗長の三人で詠んだ「水無瀬三吟百韻」（1488年）は有名である。今回検出した遺構や遺物が、それらの行事などとの直接的な関連性を考察することはまだ

難しいが、これらの供養行事等の祭祀が、行われた施設が存在していた一端を示すものと見てよいだろう。

いずれにしても、今まで空白期であった時期の遺構が発見されたということは、これからの島本町の歴史を考える上で貴重な資料といえる。

報告書抄録

ふりがな	しまもとちやうふんかびりちようきほうこくしょ		
書名	島本町文化財調査報告書		
副書名	法瀬遺跡（東院）発掘調査報告		
巻次	島本町文化財調査報告書		
シリーズ名	第18巻		
シリーズ番号	第18巻		
編者名	久保直子、飯塚 博		
編集機関	島本町教育委員会事務局 生涯学習課		
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町松井二丁目1番1号 TEL: 075-961-5151		
発行年月日	平成24年3月30日		

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査内容
所収遺跡	所在地	西町村	道路番号				
遺跡範囲							
法瀬遺跡	島本町松井二丁目1番1号	27301	34° 53' 5" N	135° 40' 4" E	2011.1.11 2011.5.20	500㎡	市域開発に伴う遺跡範囲確保調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	併記事項		
法瀬遺跡	集落	鎌倉時代～江戸時代	井戸・石敷き土器盛り	土師器皿、磁器 須臾・家土器	なし		

島本町文化財報告書 第18集

発行 島本町教育委員会
〒618-8570 大阪府三島郡島本町松井二丁目1番1号
TEL: 075-961-5151
平成24年3月30日
印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル舟町天町300
TEL: 075-256-0961